

(2) 都市から学生専用バス運行 (AMA ワゴン)

これら各回の出前授業の講師の方々には「隠岐の大自然」を満喫してもらい、モノづくりの新商品を試食しながら、ほぼノーギャラで講師を引き受けてもらった。

そして、東京や大阪の学生・フリーターの若者を一緒に海士へ運ぶバスツアーを実施した。毎回の申込み人数と参加人数は以下のとおりである。

表 2-3 AMA ワゴンスケジュール/申込・参加人数

回	日時	講師名・授業内容	申込人数	参加人数
AMA ワゴン - 1	06 年 5/18- 5/22	岩本悠氏 教室で世界を体験する「流学ゲーム」	40	30
AMA ワゴン - 2	8/30 9/4	樋栄ひかる氏 インプロ(即興劇)でコミュニケーションを学ぶ	24	24
AMA ワゴン - 3	10/4 10/9	井上英之氏 社会起業入門～隠岐で考える「世界の変え方」	20	20
AMA ワゴン - 4	11/2 11/6	海士 東京への「逆ワゴン」ツアー実施・ 一橋大学にて海士特産品 PR 販売		島根組 10 東京組 30
AMA ワゴン - 5	11/25 11/30	西上ありさ氏 「島作りと紙力」～海士の魅力と悩みを まとめて 180 頁の本に	30	26

彼らには毎回の出前授業にて中学生とのディスカッションやグループワークに混ざってもらい、中学生と同じ視点で議論してもらった。「現役大学生」というものがほとんど存在しない離島の中学生にとって、自分が将来こうなるという像はなかなか描きづらい。そのような離島の悩みを補完する形として参加学生には一役買ってもらった。

そして出前授業が終わった後は中学生との交流はもちろんのこと、地元の人々との交流をしてもらう。そこで隠岐独特の「やうち(隠岐弁で身内の意味)」としての付き合いを体験してもらう。隠岐の大自然と恵まれた海の幸・山の幸を体験することで学生たちに島の大ファンになってもらった。

(3) かばん持ち、農漁業体験

また毎回参加学生には「かばん持ち」と称して、地元の農家・漁師などに一日ないし半日同行するという職業体験事業に参加してもらった。1,2,3,5 回を通じて学生 66 人がのべ 40 の受け入れ先で職業体験を行った。

参加学生からは「地元の人と触れ合えてよい」「高齢化が進むと何が起きるのか、生で分かった」「1 ターンという響きは素晴らしいし、農業の楽しさも体験できたが、農業で食べていくことの難しさも知れて、勉強になった」などという反応であり、好評であった。

また受け入れ先からも「予想以上にまじめな学生達でよかった」「若い人がいてくれると元気が出る」と好評であった。また中学生を持つような受け入れ先の家庭であると、「出前授業での交流と合わさって、家族ぐるみの交流になってよかった」という反応も

であった。

例外的ではあるが、地元でブランド牛「隠岐牛」を生産する有限会社潮風ファームにかばん持ちに赴いた慶応大学の学生が、1 日で隠岐牛のホームページを作成してしまうという珍事があった。たまたま学生にホームページ作成の能力があったのと、受け入れ先にもウェブの知識があり、既にページ作成の構想があったから実現しえた例外的なことではある。しかしこのような形での交流も実現したことは特筆すべきことであると思われる。

(4) リピート率 6 割、盆踊り復活 + 正月イベントを実現

このような交流事業を通じて 100 人の若者が海士を訪問したが、ほとんどの人がこの海士町の大ファンになって帰っていった。これにより特に夏休み、冬休み期間をめぐって各々 30 人ずつの若者が自費で海士を目指してリピーターとしてやってきた。リピート率 6 割の快挙である。

夏休みに仕掛けたイベントとしては、設営をする若いスタッフの不足から 2 年前に中止になっていた地元の隠岐神社の盆踊り大会を学生の手で復活させようというものであった。学生 30 人が舞台設営からテントの設置、受付、うちわの配布、売り子、福引ガールなどを分担してつとめ、地元にも大好評のイベントとなった。この復活に尽力した海士町議会議長も、07 年以降も学生をスタッフとして動員すれば継続可能という見解であり、交流の一つの形として来年以降も継続する予定である。

また正月には「古きよき日本の正月を海士で体験しよう」というコンセプトで海士でのカウントダウンイベントを企画した。また 07 年の 1 月 7 日には地元の人向けに隠岐神楽鑑賞イベントを企画、それに合わせてプロのギタリストをほぼノーギャラで招待し、贅沢な二部構成のアマソングイベントを実施した。これもまた AMA ワゴンに参加した学生の中から延べで 30 人がリピーターとして自費で訪問。設営等に手間がかかりなかなか実施できない神楽講演が気軽に楽しめるとあって、地元参加者は 160 名を超え、会場のキンチャモニャセンターに用意した椅子が足りなくなるほどの好評ぶりであった。

この二部構成でのソングイベントも大好評であり、次回は 07 年 4 月に実施する方向で既に決まっている。

(5) ML (メーリングリスト) による情報交流

これらのリピート集客を支えたのが、07 年 2 月現在で 210 名を超える参加者を誇る「AMA ワゴン ML」である。内訳としては AMA ワゴン参加者 100 名、海士町関係者約 30 名、島根県関係者約 30 名(産業振興課、地域政策課など)といった形になっている。その他に AMA ワゴンの講師関係者や、日程の都合で AMA ワゴンに参加できなかったが今後参加する予定の関係者を加えて 210 名となっている。

海士町内の各種イベント情報を流すことはもちろん、海士が TV もしくは新聞に掲載されるなどの告知といったものが頻繁に流れており、海士を PR する有力な媒体として機能している。また参加者同士が自由に投稿できるようになっているので、「東京で海士関係者に遭遇した!」とか、「思い立ってヒッチハイクで海士にやってきました」などのやりとりがなされたりする。集客という意味では「京都で AMA ワゴン同窓会やりま

す！」のような掲示板代わりになったり、8月に毎年海士中学校の生徒対象に行われる夏合宿「アドベンチャーキャンプ」の学生スタッフ募集にこのMLが活用されたりもした(実際に5名の学生がスタッフとして訪問)。当然夏祭りスタッフ募集にも、正月イベント告知にも活用されて、企画の成功に大いに貢献する形となった。

(6) 双方の評価と来年度以降に向けて

・中学生に起きた変化

先に変化が見えたのは中学生自身というよりかはむしろその変化を察知した保護者の方々であった。こういった場所に見知らぬ若者がどっと押し寄せたりするととかく、「怖い」「態度が悪い」といった拒否反応が方々から押し寄せるのがよくあるパターンであるが、そういう声が余り聞こえてこない。中学生の娘さんが二人いる町内の「民宿但馬屋」のご主人も、「見知らぬ学生がいろいろ騒がしいようだが、自分の子たちに何かしてくれているようで・・それはありがたいね」という反応が多かったと話している。

それが確かな感触になったのは、第2回出前授業が終了したあたりからであった。「何かうちの子、明るくなったみたい・・って、地元のお母さんたちが言っている」、隠岐海士交通の石倉功社長もそう言い出すようになってきた。最初は「何で学生なんか海士に連れてくるんだ？」といった反応だった石倉社長も以降、AMAワゴンのドライバーを積極的に引き受けてくれるようになった。頭を悩ませていたドライバーのやりくりが楽になったのはもちろん嬉しかったが、それ以上にこれだけの短時間で変化がおき始めているという感触をつかめたのは大きいことであった。

そして回数を重ねるにつれ、中学生にも目に見える変化が現れるようになってきた。最初は「楽しかった」「難しかった」といった感想しか書けなかった中学生たちが、「隠岐はこのままでは良くない、こうなったらいいと思う」といった表現を始めだす。そしてだんだんそれが主体的になり、「自分が隠岐の良さを伝えていく、自分が変わって、自分からこの町をよくするために行動していく」という表現になっていった。それ以外にも訪れた講師の著書を争って読むようになっていたり、演劇大会が終わった後達成感で涙してしまう生徒が現れたり。中学生にも確実に変化が現れるようになってきた。

海士中学校の教務主任を務める葛西秀也先生も「ゲストが来る、といわれて最初は何のことだか良く分からないまま受け入れた出前授業であったが、生徒にも明らかな変化が現れている。隠岐という特殊な地域では出会える人間に限られており、どうしても生徒に刺激がなくなってしまう。そんな中、世界を変えるにはこの海士の自分の身の回りを変えること！などと言ってくれるゲストが突然やってきてくれたり、コミュニケーションのプロが学芸会の指導をしてくれたり、生徒達は本当に恵まれていると思う」と話してくれている。当然次年度以降も継続させる方向で各方面の調整を図っている。

(中学生に実施したアンケート例：第4回出前授業)

- 今日の授業で何を学びましたか？
- ・何かを変えようとするときに、難しく考えず、そのよさや困っていることを考えることから始めることが大事だということ。(1年、男)
- ・自分から行動することの大切さ。自分が変わることで、面倒くさいって言うていたら何も変わらないんだなって、改めて思った。(2年、女)
- ・地域の活性化にはまだ海士町がやっていないたくさんことがある。一人ひとりが活性化のために考えたり行動したりすることで地域が変わると思った。(3年、男)

・地元の若者が目覚める

この AMA ワゴンの動きに触発され、地元でも約 5 名の若者を中心とした動きが出てきている。役場だけでは処理しきれない AMA ワゴンの受け入れ体制の強化を目的として、第 3 回あたりから役場と地元住民をつなげる役割として少しずつその活動の幅を広げてきている。AMA ワゴン参加者で再び海士へ遊びにいきたい、というような学生の受け入れ窓口にもなっており、AMA ワゴンのこれからの発展形を考えていく上でもなくてはならない存在になっている。

この代表を務めるのが現在は地元の島前内航船で働く平田昌由(まさよし)氏。AMA ワゴンのよき理解者である。「将来的には NPO 化し、役場と協力して都市住民との交流促進を担う役割を背負っていききたい」といい、仕事を掛け持ちしながら日々海士で精力的に活動している。NPO 法人として地元でのカフェの運営、バックパッカー宿の運営を通じた外国人客の誘致なども展開していく予定である。

(補足資料) 海士(AMA)ワゴン相関図

